



「言葉の力」を中核とした学校づくり⑥

「言葉の限界」を踏まえる

◆ 「言葉の力」を学校づくりの中核に据えるに当たり、**「言葉の限界」を全ての教職員が共通に認識**していることは、極めて重要です。その上で、限界を補う方策を立て実践する必要があります。

◆ 私たちは、言葉によって事実を完全に理解したり表現したりすることはできません。例えば、人の表情、室内の状況等を説明する際、それらを全て言葉で言い表すことはできません。

◆ 日頃、私たちは事実を自らの判断で取捨選択し、言葉で表現しています。

取捨選択の仕方は人によって異なります。言葉を介してイメージされる事実も人それぞれです。

二人一組で行う「絵描きゲーム」は、「言葉の限界」とそれを補う方策について気付かせてくれます。二人のうちの一人は、手元の図形を見ながら、その描き方を言葉で説明します。説明の受け手は、説明者が持っている図形を見たり、自分が描く図形を見せたりすることはできません。図形が複雑なほど、説明者が持つ図形と、受け手が描く図形にはズレが生じます。

◆ このズレを少なくするためには、情報の送り手と受け手とが、より正確に情報を伝え合う、という目標に向かって共に協力することが必要です。**「一方的な発信・受信ではなく、互いに確認し合いながら目標の達成に向かう」**ことが欠かせません。

◆ 学校づくりにおいても、**「教職員が互いに目標達成に向けて意思を統一し、コミュニケーションを活性化することが必要」**です。



基礎

大リーガー 大谷翔平

求められるものの幅が、僕の場合は広い。投げて、打っていますから。だから、基礎は大事になってくると思いますし、それがわかっている分、毎日練習をしたくなる。

出典：「大谷翔平は、こう考える」（桑原晃弥著 PHP文庫）

※ 基礎を重視し、練習を欠かさないのは、超一流選手の共通点です。